911.3
1
9,10

旅のゆふし　九　長斎

三百里行の山川越隔たり雨露を凌ぎ
同郷相なし吟行の時同し年やうやう
旧郷にかへりし栄呂風雅のすさみ馬下の
かけあるき人の行すゑけふの俳諧たけ
さらし世振人の題出にしたかひ中にいり
息梅翁の姨すてのなからぬひたかひを
述もとゆけるゆるしがたしいはれて
其後此集下の部にうつしからよ
一集相ゆるすを

ねの宿のさまし吟えて作なし　玉樹
ゆくれ力に送新風の色　栄呂
りふよにしし年のまま列く　其角
見をかし見ての[illegible]　李童

あつくれも新まくらして月の秋　咲船
稲つむも手ふりくれ也の　乎谷
まやくしと稚子謡ゆ結ひけり　東竹
花畢に寄らしおかしれ　市住
入のこまに小玉船も雨月も　漁村
深みなはやすともうえ晴し　只徳
咲きくしても湯治のねもし　錦泉
傍の小頭の寄まし表門く
ちまくしと京まれ白蛇さ菊もは　耐虫
町くさらひきふ夏のいまや

蛇口は将棊の駒打つはらし
和尚の茶やもて言も起りけり
夕月もとわくそうけよ狩かくあつ
宿のりまふのてもちも以後く
又しかくい猿めく御よふつくゆし
サンゆ也の虎のや野やぬ
尾もうやでしの追ふし相りけり
村の祈るよ葉の解けき
六経寄行
菊雪思

汲ハ杉洲うしぬ良の新家ほとも　肥後　菊守
いさ西行にゆやらしくき　森呂
きり晴し稗の雨の濁り哉　覚余
今やむやしきしふふ小笹哉　只徳
もしつゆいろく緑し日の歌　五翠
色くのか御よなもゆうふ　前长
松吉ても尚しぬとめく風とふふ　貞作
宵と接列松翁の景　千翁
ゆふしゆれて鶴の女生連　東徳
気角接きや花人の果結北　左月

嵯峨よからしぬら寺し藪の花　李室
岩角の往来あけらこちらふ　宇今
嵯峨り風く雲と今ふて翁の秋　花雲
武蔵を初北修行とまく　丝冬
うら往の帯らゆらんて枝うくい
宿駅よ御く松の戸くくと
遁周も千山住りふ二朱組
仲居仲子のよりて味く
雅まうしん口吉く織とほも文
とのく無事よ居く宿もなへみ

おし鳥もおりてゆうゆう神
まれの稲田うるも泉の春
くるふかも寝ぬ行よう
出るも寺の里ものうゝの
お半晩
抑のとの雲よ晴る　雀紙　又
流れも涼しさ坂のうた覚て
書風よ只ふ棚しり行く
頭りふ長く　鶴月の吉似
言ふ伴ふしもの首もいしけふ
舟呂
永寂
東令
宣守
只橋
みけくとおとゝ宿りの輝
さ飛も冬尾ふ織て差の月
流しの飛紙行く　秋空
氷ぶりて七夕よ似て出る紙して
室ふ行くあり　武家の風武の
京ふしき紫の宇しあふしきと
然の神の宇り　方く
そえてくり流り横大の御寄
化もさらふ家る猫ふとさや
白月しとき半よさゆく枝けのさとき
鶴今
只翁
喚氷
東武
文治
字聖
伺家
宗内
色光
正又

商賣往来備覚鈔

わたくし行正慶のども見

商賣往来ハ傳も遠く

小僧を勝しておふ珠する合岳

安永にくしくにて多る相

田の中の旦下今やといふもある

あまりふくしと小ち無日

得中なて大たつるの吉み傳

はくしの新の中ふふと私

あの祖文とまし京各越かいはなれ

もとハ日頃の草まゝまゝ

これくも一室ていの方の右

お凡よ間のわらきそろて

彩仆も余程伝ひふて面の目

第周よ高意て候く

読まるも学を門う程も

身の因余にあるふ輝有

むかしのかよくしもまなら

為の帰てくるくと招帽

あまは付ふまでのほし馬

夫のわきや三日代のわきや。　森呂
お書男
信の一字ほども聞きて行くて　東守
何かおもふ流れ探
探題
鯛釣もまふ寿ぞむかしの初鰹　只猿
深草や深の千鳥の涼しくて咲　李月
顔ちかくちかくふ同種せ　東金
言葉や夢の哢もの水もくま　晩雲
也飛渋ふ水の内にや飛ふ花　蘭水

牛の子や中原寺まく夏の村　森呂
むらしや節季こふへく気のかれ　李堂
菊葉や時も秋可も気の葉　東守
年行の貢探さんや秋嵐　其角
青秋の徒の中せの地蔵　吟気
絵事行
むらむ合ふ気も遅しや暑の邑　玉宗
時行や伝鉢も涼しきのあ　王只
武加減の恭合ふあきあかつき　其均
いつもまさかや嫁の七花　東守

月影も二本の松のこぼれけり　まさき
穿ふ刈しかの稲のうつむく　千かね
又ゆかく也風なく　も相識　阿弥陀
得ら利ゑそ来てくれすそ　東今
ゑゑらの行ふもちゝ後ふ降つき　也む
芳えてる　秀石の君ちかちく　咲扇
もよ坐紙妻しく家言の佐竹在　東成
篭の一つ鏡ち河内の佳ら　乗兵
咲来る風は出船の乃もふふ　只境
神や御ゑもしく信心

ごまは五十の上の目もあて
焔往薛の年も年連
山らけら門もすゑる只師
孫よりこゝは諸一派
吊ふそ行ちゝ南無月の情
きりりゝ法乳丁也山比
秘山も新地しゝ恵法門
赤お蔵まれ形ゑもうか
ちうま節句のでも喰椒山
雨も得ゝふ時てうらしみ

萩や河原しらしもちらしく　其?

子て女や織しくも水うつ之　只境

八桐の綿を分ちらかぬの芽　森呂

川柳やさくしとかるの鮮　湖栗

娘分今や小明るぬて卯中も　両宇

蘆無子しや子子陰ふも花の紋　其角

噂ば追ふ計り径根の伝すな　东武

玉等河島の柱ば桑也御ふらら迫
江あ母も同こも往しかしし佛像稲伯
の風露ば叩くよ信卯も宮の紅葉語
の風情すともう山門着衣とふく多
り

枕山の子ちらく柳の柱ば面の行て
和津の柳ふまれけの柳けりしく
うるさく子布子用しむ多宇京の秋に
この紀みを紀も借り小かよ河みぬ
文子紙秋しく

玉洞信
正未亮

照帰ふ行く秋也ぬや成て　仝

宮の千和行くるら比ゆ御下の
柳ふ同子同しく子めるの自らまた
風女の信卯子けふふしく

除ふ沼そいのうふくも積清水うら　仝
作ふ（波）なかお行伯いけ美も信を
源くよ日ありやよ小けありの風
低ありてしもうも其二の紅葉るう

梅桜おもしろ風流かく何
からしもとかや此村の住居あり
かゝる桐情ハあきあはれふかし今ハ文
思の有信も来きしろし文化翁の年玄
ふしもまだ漂よ桜咲実世見ハ春よ
又し再会相待しなし

風薫る海山を眺めしま　仝

お末咲

小鶴なくらむ行信し門へ入ふ　称石

古家よんのふろし浪花　宋斎

仝

まれあさ宿くも帰るむしまれ　遊園

行しむ秋の夜ぞまし八百や野も　仝

仝

菊咲く詠とらふ日宵こよ次　ゝ家

こゝろしき月の宿のすゝしさ　仝

仝

妹ゆまつ咲の紅葉絶えて　常家

あく風の草ぞのあ秋　仝

仝

秋し臭虎もふし　鮎夜　里見

おふし萩の清水涼むね　仝

空

天としのはじめこそ新家ぞ　風柴

新家のふるきも改めて手祭　寛斎

御書始

御えらみ出よいらし明おし　了更

こゝろも古家の蓍で御世かな　子常

いつの手よりつとし祝松も花　宣亮

帝ゝ飛やう首蓋何蓋も　宜照

月のさしも何事かの在付き　南渓

立春も初春新家　寛宇

あふぎよ受用もしめくく　良信

何ゆへも改まる法の家の　麻谷

新しくなる松竹の初日影　千鳥

元日やふくら日向てらしよ　紫丸

鳴鳥も窓のうちより起出て　呂德

節句の用意の中に迎春　李亭

引くしもの中の松の音　湖水

うれしさもよく山の中の坂　白水

ならぬのも改ながく雪くも　東民

春の手拝紙節たまり　然之

以江の雨も淋しさ降りくる

根苗の負ふてふてお誂
衛士の焚も見えけれ松の月
都ゝも煤ハ出ても煤
嫁ぬの家御分やいさやさ
糸ふらむ戸ら見えて出ゝ
わ沢しその重への枝に
いろ惜しの香もとりけり
桃仙
しらつゆや鳥啼ゆき山ふるゝ
音の月や相歳ゑまつふ向き
京呂
露我

お月清や秋の千種も如ふいき　此湊
蝶の宿もさんさん切て牛屋　冬岡
子て女や風わすまる子の眠り　菊池
和のども三えい若し汁仕る　東武
蔦やりまくしあらくし喰　洞家
人の行目段ぐぢ物舟るふ　京左
らり打き雨のそふや佗てぬ　菊守
月蓑や多る佗ふわるもふふ　算庭
来ねらて洞戸も叩く小樽ゑ　此外
お書眠

よそ目にもあはれにならぬ夜の時　すわ

先行くまゝよ家も宿の晴　玉家

何かしらふ二方ひらきの松ぞ人　春臣

仕切し新堤の竹の葉も　東今

紫陽の何節も来てみとくれ　了也

ちりしらずも此上るの　南浦

川の下まかりの月も立より　東守

柳色のあきしもうしたる葉秋　嵐雨

柳くて明るしも紅くて紅　木成

嘆するもそれし　有店　色兒

七ツ下降すぎ雨のとまりやう　仙家

生気分ち惜しむ　掛　只流

とりうつし朝日に居ますを聴く　志也

跡かくれ花をそれ行の音枕　東亮

不高き山花なきらくきらくも　嵐嵐

日も二日の新たなかれそう　芋竜

打かへる枯れ柳るも浮りける

ますしる梅し家の猫ても

見与へいふの宣へる神かな

あやしはれ　浙船の白中す

ゑかつはせしちたるにもたなく
景粧をしるしきし秋山日
きらめくさまは何事に歩みを猶
京須磨の浦を今や戦場とは
引くや旅人らん後の常盤なるし
大に仲弓の行てうけは
かゆくるふ雲の錦月の光陰と
さらしも仰けに秋には緑八の後
巳にも宣閣の破のうらみ
將にも蕃に礼もとつて校

ぬらくしさ繁にに風の花ぞさらしに立
稲も木めに世の荒ふ
軍勢ならこそ行に能路まとゐ
增らに行承でも当用にも
阻瓦の稲ちしや行猶開
引しくしと落花して川
田の葉に菊あるものくさ異
お寺の跡のきとぞ道作
引過し六ね源氏こうけさかく
係あとしの荒にけらまん

思ひつく事ハ恵方参りしけり
え結ひの冬を直し中に
見やくと三井の店のとくあき
ありさちしのまつとおれ
多数の中ちのまゝすゝ日も
あくご入てあらふみの君
初ゆかし嫁ふハ卦判見て中
口金の松を入れも旅から
茶つけ日和も佗くとこのれ
あとらま梅ちあめ降く

六吾十韻

肥後の越後まて留く四季多くられ
中にも四ち海のあまりいこしら海の信紙
最も賀も本ら村紙とくしく新信く
あしらるまは上實まの松のまるへらん
両よ作りくるゝまアちはゑの兵ま、と自
ふくふとも海國のかほと即ちて赤日ま
月ま樽梅も中野州の行あいけ家なし
くまふ海作しもえま有中ま山ノ有
むく今ま新情紙きのめくへき
しえ支すく紙て命

玉つ舎

はのよりまで山連を得しまれ 栄寿
縁し涼しふえて冬生の情
弟用ま新の公篤も訪しゆるへ 森呂

涼しさや□□〳〵　□□

洌れて月夜の酒かな哉も　宗意

ちとと扇は又とまり柳　良尚

ね溜のあまりいくもさしてて　是的

後ろ気にて畫は室作て　宗定

浴ひし川沢降とゆる竹斗　呂洸

待りや利も魂の嘆い　司呉

こえ如之此山のともちれ比　お逃

啼啼降る比の暗ふ　草亮

罷かく音に鼻は夢てつく　凬采

野分まかぬ月ちらへお節　季日

何か崎を呼よ山かな館の名月い　里見

立木秋の内も□ふしは豆　東民

月よ山谷は□代の小町さ

顔しゆくいつなかい稲の

叶ら寒る夏も月の秋ふう住

雪や森やの中の猫詣

振袖のかゆとうかさしぐ児之見と

気ふう□行つ近しい

日の御もらしくつてなの色

傘も囲ひの梅哉すゝやゝ

探題

鶯ゝよやまし初嫁の着ゝの帯　李由

夕ゝかや入わたしの一徐乞　芳桜

川かへや出水もかしし浮うく　僧氣

物を家楳解よそ水の作ゆく　古文

何のゆや先へ亀の内うしろ八ゝき　呂隠

葉ゝうくもよ月を額て狩ゆゝ　東氏

古池も昨後乞ゝゞ草の花　貝附

日出ても出哉わしゝや呼る　亨羽

小雨やけりく日中の移ろふ哉　南紙

神の殿の柿あきハしゃ柳情哉
出てゆふ燃所のつきへ計らす家の祖
納を梅雪行ゝ柳にて乞くしの石の前
眞も世しくしうしゆゆしくてめく
米そゞの梅ゝ島とちくし乞てあきなく

風の後ゝきしらよきしのうかくしま　象宗

おた咲

来る様もなの気つくましま気らしい　江楓

仝　紅亭り

梅ゝ哉せへくの雪よ係鉄鳥　李宣

そしのおもかも花ゝこの花　玉宗

こゝろ[illegible]
ねこしも[illegible]入[illegible]
[illegible]月の[illegible]日 [illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]のあれ[illegible]
[illegible]も[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]池の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]の
[illegible]
[illegible]の[illegible]雪の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]月
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]

分やすらもさの世界と如海し
前代時の水も中ら
経寺行

涼しくうめ流と色ふ汲く　玉宗清
まの成り我まりしたゑ　貝治
仕入うし馬よく出し言まんく　常定
お螢とりし宗ふ男ふり　そ的
月影もとけし三本の花ふ高ふ　重亮
小晴ゑくの角やちと紗や　東令
ま寧に嫁の新作の送り結　只涜

はくとうワ了秋うやなも近た　森呂
此所ハ市のお符も要らんし　湖雲
行まうかりふ新の為の　末氏
咲楼ふぞよ畑のちりく　年月
よし小我そうしふる森山の情　逸聖
今もちやとしめ汐の松ふ姉とが　覚紀
あの夢折ハ知もら涼み平
一本まり雪吹宗りの下秋あき
まりう忘れ小町のもれ
粧粉も生ふ喰の逝ち談

折柄の寒気如何御しのぎ
いらせられ候哉うけ給りたく候
ば可なりの事にも候はゞ
様にいたし度事にも思案
にて八ヶ敷候も毎日
かよひ候て御しのぎ被下候
若衆中にて折々御集り
百韻を催し相催候
申し上候てはかゝる御
来らし御光の程願上候 日

さて折の谷のきつきはなれ
所にもとしき音なく候
ふいりてまの流のことしに
宮と御通しての流の
扨雨の月の今宵の影も清く
御出御見の檀も
様にて御座候
浪なるに折々
帰り候て御清らかの程
山家の習ひとて一筆

ちらちらと松文ちもせめくなかり
酒は遅あり深は使あり
作ふかなく我のものゐくも
ほれ新しのさしうちしの
おゝ雪晴　喚家
我ば立ちまやややまちとも　不宗
待ちまこの涼しさも今　只徳
咲よき僧の中にまきしし
門口出小く出ま花れ生　東月
し門まりし僧も晴まし盃の月　策応
さめかけり水の流　之河
まれしも茶園作の秋もれ　嘉右
縁付て来る紙くれく　東良
道らいかしけの旅やつさ　沙雲
余程の雪も寒く江戸雪　有文
人の気も花の春よしやりけり　策応
小さなはしてもせ我れ我　金句
其がしる関情茶湯の縁日　幸定
ねまくとゆく夜の雪　了久
其雅まとも好辛仲すゆる会　家桃

神にも力も君の言々
宮に宿くけれの[illegible]
松の葉越の月も涼し
涼しく鶴帽子指[illegible]
南価ぬしの風呂浄瑠璃
入道の船もなきし[illegible]
八[illegible]の色は是論
吹く夜の夢も[illegible]
しし鶴の[illegible]部
稲荷社奉納弁仙町

三ツの火のともしき中し宮桂
明けき雪の庵　　　　　只伽
今も青通の花の香めきて　　　斎呂
ちかりと一勝まさく　　　　　　雪亭
満汐によきしひ船の舟もなし　　　策今
雪のきれしく何と簗ふ　　　　　　補
折まる日のくらふ小野としく会
錦る[illegible]
桜花りやしれ河[illegible]桂
斎の[illegible]の学羽は[illegible]

まへの松をこえて出はなれ峠を越ゆれば
けふ松橋をわたりて日市の町
若あるは橋川兄きの札の辻
ご入部縁てはいのへくらし
第の宿よりむかしへの榎へ送り
はれ気も沖あしらひ
ちらしの遊山もおよび明の宮
やがての眺めは新ちらさる
越しろよりさし浦のたり悦
行かもまれ寄りたまへし

一たびいくさうりて嵐をはなし
みて女しもの畑にしらく
荒寺の少代しらまだ寺の
屏風にあきらや二小やはせ
咲しくかつらや陰れも寂す
若の露われは行き中程
境をしられも覚しらは月ふきし
吹秋しらて松の月をみけ
舟を渡る寄のしらしの波なるからから
蛭聡則の若者に入

何挨もお隣組なりしかし立
四角でもあるなら京でも
見起ふ事起りし見てけりせて
猿となりていふたちも
わりなし神のみちのむかしや
婦流生のまゝめでたし

梅花

宝船やつくつくしも岩のうへ　京呂
梅さくらも八重盛りし陽春　羽紙
蔵ひらき京もあるなる中の春雨　貞紀

梅さくの国も花見ぬ春四月　只枝
月の出る角ともれ棒かな　鳳京
川せしや柳はもえよしや　守之
そもそも花さし泥の花盛り　行序
菖蒲や雨あがりの菜節　栗令
わりなし柳も梅も花さかり　芝雨行

肥の何がし家両何かしゝ
きぬ風流の国なりしかし
ての口めかしく卯月も中旬
の行ありしも去年のもとを京
河島のその梅柳もいしなかある
信紙梅し犯のし風流の卯がある

陽炎助けて此身も立ちし流水の影
宿も借りて経よ何しぬ事
ましく思ひしにや宴の知らぬ夜
講ぜよかしの空の月やすくも
岩見の御所の用捨しとを千鳥の
情けも國も行く

世あらし夜の月の涼しさも　如柳
さらの露しに菊も書る紅　世満坊

おなじ　暑

まくらもとに小夜ちちみ萬端　正宗信
はら涼しさに撫よ袖に月　一楽坊
河岸に梶の浪音おもひやけて　李亭

さすかに押しめぐらす身をなく　森名
楚々の秋梅の行く手月の前　雲紋
新涼の夜ぞ帰るかなよや　伊木
晴れしかはちちに呼ぶ秋　任宗
嬉しきにそれも月を忍ぶ名　了也
御立ちたりし我鐘の掛ておる　東保
とりとめぬ此の身の轍　呂鏡
このゆくにても押に夜を鳴く　貝翁
書写なら前もて案内の中橋
わかる宝の鬼面にも行くえ

かけ香やそよと吹て水も晴
ときさけのきよしもすゞしさの人
凄し桃の吹く□いろりも
ならへしに根さの修小□にて
了きそりくも節まふつゝめ
日和の月さらりうかしわらしれ
背戸の柳もはおそれ
同居行て夕凉よすゑさ
娘さしくかくふ山中
ちりゆき暁との露

わするゝ代の長い日ね哉　桐州坊
ほとゝぎすの毋衣ふかくらふ□の吹く　一峯坊
青柳や伸して仏をうつしくも　其風坊
松風も薫りてくるしとはいつ井
花のちりもみちてまりて

頌寧何　栗仙

一隊と常の嘯り五月晴　東氏
岸の草毋に倚りて涼風　常亮
仙人の中に住むし高峯て
此刻も雛さてすふし　東谷

いさ雪の[illegible]も[illegible]仲のふ

ぬらふく[illegible]し[illegible]

あらゆる諸々の市にあふくす

まなふしし佳き[illegible]の口よ

[illegible]くも[illegible]山女子の[illegible] [illegible]

[illegible]しの世の宝

時雨の捨てのこともここ[illegible]

老[illegible]の[illegible]よらけうふ

つくゆうふ人の[illegible]して[illegible]人も

[illegible]しまたらしまし心[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五月六日 てん偏

篝火も水にぬらし鵜舟 正宗

風のちる明月ふ火も隠す鵜舟 家守

風ハ流れ灘山ハ川し鵜舟 文昭

入果ず男ちてたち鵜舟 東白

淀よ吉山淀よ吉山や鵜舟 菊照

ましくも武門もすまし鵜舟 春呂

のへ人のうら傾もそつよ鵜舟 李覚

淀の[illegible]もうまや明る鵜舟 玉翁

おほの岸淀あつまして健京

[illegible]の川し御所の[illegible]

[illegible]篝の一[illegible]流

篝の中[illegible]の[illegible]里

[illegible]の[illegible]新

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible] 玉宗清

はましたら風もまかりの[illegible]

わかのしや師[illegible]淀 玉之

こちあらぬ一[illegible]ハ 宗亮

[illegible]ハく 実令

もふ[illegible]の月よと 覚斎

[illegible]の[illegible] 李覚

ありしやうハ大宮司殿もいそかれあり
仲人やうやう延しらる縁組
はめしかしお酌もちらし候
恋もうらみれのまゝくと
ども今日切りけしうかいしを
よ草ちよそうやご来臨
かくの何乞食か残念か
曲とめよ今を聞との御茶
嫁帰のお代すゝめかいらしと
引けり晴れ東子亭翁

ゆきしへ振りそも須ゝのこ
笑ふやうやう何かくしぬ
月の光もそみふるめるさしく
雨風も夢ハく昔もしきる
明りしさ錦も金らく女世帯
ふしのさらしま地の夏如月
咲きの花も来もふ
挑意
いかしもか口目のうつくし
ゆふしやりふと咲きよや柳が雨

梅雨や又つゝく夜の雫しけ　千和

糸て出れ月もこましと冬城山　吉女

いつ川の風は涼しくもちる五月哉　孝之

若れ門も退て門も笑る清水哉　蕉鳥

夕ふ卯して夏風月の根に遊し茶業
ふらせる露に松よいふ牛しかき具
花らしの玉東とこむらしふ見て亭の
細おおの具し卯月の往来に実矢
おさ小卯て

月も風も自在に涼し巳様　世酒作

せらくて障子に栞おへ入ひえん　更之

風折ゑのうまし字ふし折にきまかの
すゝきに折せしさめ所行世も色
ほろふ中にゆく亭まの色しかり平
ものの餘のの山石ふりよ山よ哉
細御して

ちかしこさの中のれ亭の花り　玉京作

こゝ夜涼しき山ふ縁は寄れ　亭主

ゑのすに思ふの傍にいふあき　玄今

此篇先篇に様て句て色　李竜

秋月の中にましくさし折き　儘泉

ねつる表てき京の義入　千和

ゐのかむらりかて梅の神宗　宗洪

ゆるき舟の移も揺く哉　保和

いさましふ宮ふ扇ひらいてか鳥　羽紅

家の留守よこしふ猿の波　かけさ

わさ中ゆふ今世は恋し蔦川　首栄

末ならしふる小の秋しさ　泉經

始しきの风雅の同躰は都にしてきは
らしきの月り往中をもりはくれ物
とりわけ旅の友に便ありて涼しき
身辨の咄けよ扨のまつ江と清め山
うそぶく夕涼ゆゑ仰々しくり林同氏
佳景をとくかり宗匠に文をとしめくえこの
正門文開けお号をふ改作の二字
被もかしこし伸よ分かく信紙らる
ふかきよ今日のおもふよこし余波の
つゝかしく海山の御情いはくよ了家
がくらまつりとめ身を依なりしを

○蓬佳景の二句
ふゝ肩し

日紙去るのあはれあてけふ

橋すやくりのなみ見え又流ん　一宗抱九

色澗谷

又巴しゑふ涼しきのりが清し　字逞

涼しさよ行もうけしやおもり神　壬鶴

蕎ゆりや何とるぬふ風もなし　洞宗

楢雨もしらしぬいこゝす分きの境　只徳

うくとさけ中をやそのもの月壇　受紀

涼しさは去ふしへ分ふ谷小分　廿楼

一本紙分かりけ前未咲

須磨〱に梅雨も晴りの宗清ぞ　羽紅

二条の[illegible]や[illegible]すむとし　湘水

笠取やまとふ[illegible]あふ蕗のうら畠　李由

可惜涼し湖おおえ也

まつのこゝまてこそもしはの杉涼し　李由

つゐ尾ても手し森りの出作りき　千那

文道ふ日のあきいたし涼しく紙あき　羽紅

清水しいさ洒くむしくおもしや　丈艸

済南にいとあの暗杯も読上三千條の月にも見出杉中の涼唐よりくの雨涼しさハ壺にぞ宗清ぞらし

いりや湖南の湖敬は水かきは涼ましき先さぬ杉まにんかきあふ月見も涼杉は見えしよあさもま湖の洒高もいさ涼しおもし山の中ばにわり合もまるかく東西まおしくて　[illegible]

山清水宮とわりゆる長ちの形

涼しく涼しき紙あし山鳥しにほ　李由

むしくに唯一の節をさらせて　千那

離杯宮のおもしうらかり　尚白

試も見し出の杉かきいさ見登　乗金

無しもかしく家村も出る甲　正能

玄上我月ちか年に御し清　雲鼓

あちこちは植ふ了もすゝやら

　六八句　者

日〻のおりに樹情のあはれしと
気の宿とゝゐしてし三四里ばかり
一根のこゝに抜けしゆく
分野見にゆくとき席まの様の儘　　玉家治
玉〻のおりし風まで越をゆく鎌問
のまゝ下り新茶の門よ
何もいはで涼しの畔はおもふら　　東今

玉家河房の秋とをしさえしく候ね
に路師とこゝにましぬ候ひの
のかくれしに住よおもへる伝向の方からん
に人家しく月影見えてしもりゆかう

ふく風の気秋娘くふくゝ尚も新情
のいましみちさん
早きりや色も手向け色ふく　　家亮

　蝶柳宿し

蝶柳や茶さへもいけ門多　　玉家
蝶柳や宿もこゝま新茶門　　斎呂
うまく柳や様に越けの酒家もあと　　東今

五月廿一日

五満濃の国あまり市ら場河
の傍秋鹿にまゐり見とまのくもゐ
勝角山のへとみて初句の枕にいふ君し
さらに宿には小宗様会しに稀

[illegible]

神ふ世(?)にも隠ぬきしの條源し
庵も酒蔵(?)をれすく在所(?)
何(?)附もろ小節(?)めるれけ也(?)
商人の行ちて白(?)く
村(?)へ月て停(?)もおちこちと

其家(?)
桔梗(?)
眾(?)今(?)
森(?)石(?)
芦(?)昭(?)

新家(?)使の良(?)ややまかし(?)
鬼(?)留もわかのふおもけり
おと一つらの茂(?)るか掛(?)る(?)
よもにう[illegible]家かりもへは(?)晴(?)
お流宥(?)して刻(?)ふもぬ身(?)に
七文(?)い包(?)白(?)れてども咲ける(?)
とろくめでむ好(?)の浦(?)作ら(?)
寸(?)の業を罪(?)もむくひもいつか(?)
気(?)かふもうれて一つとこう庵(?)く
情(?)を来ふ日(?)使の庵(?)に宗(?)果(?)も

宗(?)鹿(?)
文蛉(?)
有丈(?)
宗(?)助(?)

市のかしこの春山の山里
ゆかしく年も寿との賀ぞ流れ
いさ白梅の陰り出る藤
輝りし夢といひ月影も
花も芽ぐりし霞の汀雨の
薄紫の口説といふちあぐるの
光振ら樹に輝に似合ふ
よし得にくくて吹びの風
前にさ移の末もよけれ
住まむ事也と正風に入けら

新まつ御代しかしすかなれ 紫家　雲令
新御代まれし口正の家代なれて
寿ちら梅ふ開もわりて色清れ　桂冨
一樹の梅も咲くならば春　　　桂冨
　　お年賀
えくらぬしき長る様枝の原の秋　桂冨
松原に芳しき風もわれふ　　　雨
　　仝
悲ふ寿の風よ手ふりや子ぬも　芦洲
出しらしの続まし梅雨哉　　　雨
　　仝

蜻蛉も涼しく山椒が茅の中　文流

桃くりも暮もまだ新し　初

探題

花かゝる月も眠らぬ紅葉の色　信房

をみなへしの錦がなり佐野錦　芦明

夏やせの身を思ふて出し田植かな　文流

ましの色にはなしかりし哉まかま　岩てう

豆麩や浦さひしく虫の聲　森古

さゝ栗やをみなの姉も深ふかくて　東亮

おしけ山中しく出るより雲の路　東令

お出吹　森古

秋風や浜もゆくも立とまりけり　信房

雲間見えて霧の梢先

おしゐある　東令

空は雨月も照して夜もすがら松

一様の露も帰らぬ哉　信房

ふ秋の雨に雨からふふて　森古

まつり当日の節もわかく　文之

このつやくすむ出門の月影　芦明

蛍も秋まで盛が淋しさ　東亮

花はちりても松の緑かな　仙吉

諸ともに[illegible]の　送り

はらくと[illegible]の[illegible]　[illegible]

[illegible]　文翁

後は小さく神楽の[illegible]　家珈

[illegible]人々神行　[illegible]

下略

おと晩

なかりも晴行や雨の夜あけ　仙姿

月も涼しく[illegible]の[illegible]　寿

青陰の[illegible]一面の[illegible]

[illegible]

青[illegible]　[illegible]

宮の[illegible]

[illegible]

[illegible]　[illegible]

湖ゝ清風の洞ときは何とはなし
かしこ寂しある雪晴風まの音すゞしく
様して

簡ふとかしこ並まゆかりの宿涼し

一乗庵　宗全

桜の中し十

皐月廿五日　　佐和

去年の冬御江戸より出立ちて三十日あまり
の旅路を行き中の清く閑かなるに
出立ち侍の事くるとありつの世の中を
光情を御さゝ様の湖よりよし
行くさ山路清風の洞とよる亭に
ゆかりありて舟と舞ひて京中も
見かくしも行きたしにさらの一村に
言葉の事を思ひつゝ清泊の
芳情尽の中とて

吹かれつゝ見あり　青あり松の露　　南

様の里の中ましき行かな　　里白

旅衣の仕立も出来て　露白
さらしもすの見ぬは辻　今登
夜ふけて松の月見る　里令
婦の小菊も遠く伊勢まで　宗楓
仙の傘下手も松保り　浩翠
いかの続の小手あつく　呈亮
接用ふ間もの出るは一寸
冠さて下かすも葉平
ちと係よりさふても補く
かしても南なる坊し。　菊蔭

みそく妙を安信の小ふかさ
又さき猫の信く兄さう
川にり行り作て探り雪の丸
葉旅楼れ網て由字記節
これ白妙く将手も渡るき
め肩もやしさぬて名
常の川は甚ふて月の十五日
葉の若よ。寄清て外
深くしまで成つく孫もわち
不斉の流れやいよき

きさの宿ふくれなしの山寺
作くもしの家あらしくの
別り舟今年の枝折を杖にして旅の
玉章を得て風雅の徒にまみえて心
行れたる旅路もあらしにさそひ一かた
ならぬかりのとの小枝もひとくとて
へ行あふくる
身はしもめく旅衣の雪く哉　一字庵　菜今
お古跡
古寂のまゝおの行しる秋も寂し　鼎呂
行く秋に今宵ここなた涼しさ　了也
清河の鼎呂風にさそはれ古寂の宿にあ
の道にとひし宗匠に行脚く暮れ
あしくも月に糸しさわかれに言
悦ばしく行けむの風を枝にして
先も〻まちて雨行うれしき風　八千穂
花の枝ときめくまま山　哉ぞ中　鼎呂
附刻
去行くて一夜の旅のめし　河水は雨の流
おもはくるまし月夕の宗匠の趣深く
宮の卸色も比しの枝折ばむく今宵ぞ
ぬるなしくも風雨はにはなる
けり旅衆の行脚に月は情も金にて家
あまた月にも古しとみし身今日行くの
柳もとらし吟しくも手中にしるき組

清水の[illegible]と東西の[illegible]はつくる[illegible]

おもしろし何れに清水も　金秀

門涼しかくれ[illegible]や[illegible]も　柳枝

川先も蒼し金の風とも　子日

おもしても蒼し[illegible]風の行　素鳳

振りむき[illegible]扇のつくるとも　巴山

越中[illegible]涼し[illegible]の岸　千史

川先も涼しく蒼き[illegible]金は風　梅史

[illegible]涼しき[illegible]て　素版

末[illegible]も涼しき[illegible]水[illegible]　乙馬

[illegible]文[illegible]の[illegible]風　芦人

同じ[illegible]しき[illegible]とも　竹風

参詣の清水[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]新[illegible]の[illegible]

けふの月青くすみけるかな

越中も紀をたより富山へ　雪の岸　千峡

正しや南すゝ文作の水院　千峡

そうみ晴さしくらて　梅二あれも　東全

新宿の茶殿しく

とふし蒼てく郷ゆや　曽ほ切れ　東全

ゆふや何[illegible]にして金[illegible]中の[illegible]は
清[illegible]て[illegible]の分[illegible]別[illegible]と
何[illegible]の[illegible]一[illegible]ふれは
[illegible]の[illegible]
さりとて

なりしこそ[illegible]あらで[illegible]　玉[illegible]

[illegible]の[illegible]のとほり[illegible]
若の[illegible]やちりし[illegible]　一[illegible]

[illegible]別[illegible]
春雨や[illegible]　今[illegible]

雲[illegible]の[illegible]雨の[illegible]　梅史

はる[illegible]風の[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]雨

[illegible]の[illegible]新[illegible]
[illegible]

[illegible]　[illegible]

今[illegible]日[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]新[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]や[illegible]　玉[illegible]

[illegible]

ふくし紙子ておふや　[illegible]　里今

[illegible]

日御あつし[illegible]の禅[illegible]紙

[illegible]

逢ふ縁あれ涼し[illegible]　貝賀

[illegible]

涼しさや[illegible]　[illegible]

[illegible]

夕ぐれや垣の月見て[illegible]　全

ゆふぐれも涼しき月の台　[illegible]之

[illegible]

[illegible]

涼しさの座くらまぎらす茶小袖　果亭

お去脇

風薫る[illegible]あめふる夜も下すずし　[illegible]

若竹も咲く[illegible]　[illegible]

去年の夏[illegible]月[illegible]

[illegible]

[illegible]

いろ[illegible]の[illegible]　里今

途中の行[illegible]この[illegible]

[illegible]

風[illegible]のゆ[illegible]や

[illegible]

ゆふぐれ[illegible]や[illegible]　[illegible]

宗[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]一[illegible]　梅[illegible]

去[illegible]

[illegible]

[illegible]

今[illegible]の

岡崎を宮ゐとさだめ給ふらむ涼しさに
とりわけ池の水や折々近江の海
世に知られ出しいく筋か流れて
ふゆは風もなく冬の竜田は姫　甫
せめてはと思ふ紐ちらし打水　杉中
初中に粉雪の降る夕ぐれて　宗□
夜明けに芭蕉の二字に打ちかへす　宗令
時は竹に二夜の月出て　重辰
帰ることのなれし秋の家居　了治
中々に宮に鏡をかく黄菊咲く　芦舟
枝に雀の子わしけ掃けば庵もきれい　秀覚

二三日かすむは雨はれて
おくれて見れ来れくるの
松梅はちりて桜の葉も又
折もなくのどかにうらうら
初花の影なる所も物うしと
樽にひかし東の連も様
風は雲もなくなくうらゝと
柳しら花の中は匂ひ立
今しくも三条にかけは限
不能の宗匠の法華経

久しく[illegible]月も[illegible]ける
待らるゝ男の始の今日く
まりしく思はし時くぞの色
分やきはかりにける将の君済
世宗にら人しへ間に休くアの様
この陳伯もまる方なる何は[illegible]
まりしに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
玉宗[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

この梅も[illegible]　林雪
[illegible]　歌右
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
あしくも[illegible]人の尚[illegible]　歌右
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゆりうら

ふくらかぶ筵を敷けば風の中　松堂

涼しさ雨をふくも見えず　篤宗

表目のもて行所の柳にし湊の南へ
すめやし一ちよ行のあまし川しり
風行の往たにきふたかの暗さに
さうらしくの西をよりけりひとや
河面の松かげ柳山並を渡し
の節けむけりけりをけり

青柳さゝ西を見る磨の涼しさも　松宇

はしりても蒲ふ枝ひ来し暮　里今

こゝもとの水わしに柳し家の俤心
うけ給ひに表目のわくうきも又河面と

あい行傍に送て来られ風体の南をも一よ
わかのまゝ南かりくふ竹や日出る月の比
又けりや河に清水をとの青み蘇をもちくり
河も又四文の南をも松の小かくのかり所
わかあつもわかりくあさよりに宮あかの窓
なほし行くも

夜更てや古寺の星のありし心も　篤宗

涼しくも涼しきりの山よ　松宗

鬼舟亭にしおくに脛

堂あしんできまくくりろくや方来支　里今

一茶をくに山にと竹をにまゝ
遠くかけて門いふ宮の都かをかけ
くたくし飛かく年の風俗も山くらくし

むさしの隅の漕ぎ出けば水かしく　出雲

おさ吹

ゆふかほや井の水の増しくさも　素丸

かくして涼し庭の松かけ　東底

仝

片袖へ葉月こしも暮の水溜　素丸

ゆきは風の音はかりの中　素丸

ゆらしく

暮れて猶もつけるいよし男妓し　乃丸

涼しさの中行秋ちる顔　東令

いそいそめ京風の絹綿着て　近胡

行きし山ゆかし家の土産なり　一の妓

月の前ち打出師の人通り　東底

思はしく指もさかり置く者

行れて身を免身は物の憂たり

日和ことはゆる今日の朔日

ふる里は石里も皆流し

神信心も稲のみよりかの

よ古事は枝折のその良きをこそ

京さし山けりて新京中いし

ふ経ても掛けもつとも若の殿

のも立行かしは隠れし入れ

ゆき来ぬるかし札の立てかけ
従ふてく親の跡縮
式日も流諸かゝらし給ふ勝
月も流して残れる嗟
千首ちて字ふちて降しきの手も
あつく中にも曲りし田給
下戸ゐらし字らふ行きたのく守
詠まししもいつし出坂
娘八しめきらての飛も日の出
君の縁やすれらくはま

あまりの涼縦白きかくしくいさゝか宍
皆めの情しろふてきも月けしうの侘れ
の情さくしくきも使はしよろしくかりけ
園すかりしくは宿の住まひしくて

この月にいつしくよそやはたこの月　一桂
縦桜ゆふの宵も涼しくさ　正行
行あへ君の夏も忘れたに　宗底
綾月の水のさしきわれる　竹水
手ならふ高く飛ひさ縁　新翁
すふしし人れしき妙法
宗冊ら冷気立ちしも細小しく書
松ら字すふけて実ら色

小こまかに連て飛念のこかゞ呂
　薪入がらの身もさむし
くれ相は飛ふこころつくる鳥の声
　空に帰れる日かげさまよ
越前の出より蕎麦櫓借
　雨雲低く生らかく行きし地
芝原の開き雪ほしろし嵐
　くれぬ子あさの鶏らしく
月
霜ちるや白萩よこたふ
　河ばこする秋の小の玉川

彼馬の音帯しる子生りまで代り斧て
　出かけやらりやよしてたのまれ東覚
枝すも桃しかの花のむかしく
　花や角をたし雨ふおしまく
空ふ白雲もむもちと飛ぶ
　山の花山のゆしも東も
　　お之晩
涼風や花もよ代伐党て　嘉之
　さへしくを残してもなく松ゝ斉　宝石
男ひる音花も馬の背まるく　斎

ちりちりと芦も穴ゝの所　村生

わさ中ふすふしも月の行ふきい　雪暁

嫁入も机の字ふらん内　宗円

嵐ら日の音かなの四窓し　芦丹

ちらちり仰ぬきに見にくれから

嵐しいやや国ぬもきまてかり

めり月も引れ吉の安慶

まれしは時のら人の甚こう綾

随き佛のおしくり去宗

信濃路の奥ふかくしと百作ぎ

言つとしふとしさ白ふ之しや

蝸牛の池を澄のかけりふふ

今宵も可祝しい哦也

愛来蛉の花ら笑ふ来のしと

とゝ霧も中りし辯の拵てな色

月も入ふしも完の所とて縁い

陰よ命まよ秋ふしまきかふ

京はちりふし免角ましの

芦しさとの旅も同さしれ

和びの宗ふつかきし係らくき

新しき縁ふ弘まうしあとを

右句由来を人にたつねし

此御神は秋分の後社日に参らは
ふ此様の出店しもいふて参詣しけるを
ねんや雪雨国の出…一句感さ
けふの都…しさらんや

将中山く云字の学え師らしや
色しなどきぬきの句を
あはせけるありけれはこして
此身しの其後あらふれ
きこゆる折し立しる日の学
漕ぎ出し岸まで柳の

枝雲

宅右

ころあるまうし一首よみて
響く車輪のごとく聞え
祇園町縄を張かへし町
此時節の事なり
けふ此頃我が罪ありふつゆえ
夷子何ゆゑ鏡の指竿
見物ふけ言ふあり女の帯ふし
けれは頂上の小舟に何ふ
しかるに捨てしけくも雲の中
酒を出し博士あの恵ふを

涼くの名人御工夫なるゝり
さまあるこの外をもへも
ともゑまは皃にて月の前明く
細よそあふくしもれ戸被折れ
つくし傷しハ八卦被露ぬ夜に出色
なくしくも深くてうしも姫
ゑあるハ可なく行くしのむも今
今晩くの今もすしゝね

お半時

秋ましも違ゑて々の尚涼し　舜呂

上つ方つくよ晴てきのうの夕日　梢雪
町並も式日ちと内会るあふして　言義
こよみもふもゆふもふらしくふ川辺　東雨
踊くもからくてゝも盆の月ちと月　箕谷
雪標の霜は紙にせん秋と　人由
打角し嫁の宮持のかくし結　芋舟
仕打あかすて物の行ゑの　雲心
つくね白のうち宗佐しくちゃり陰り　青舟
ふおお白帽とふ形もよけりゑ
四十路てとてら年の暮

寒さよ寒さしぬ　定
とらへまきて富士もなかりてかりく
通用に行かいふくらふけく
役候の大竹を安の事ふ
くかうりと時く雪も古白
此うちに紫苔の花の亀
情氣ありめよりにの行言
明けしてまし人様の日ゆり
誠に備の義く丹丘の地名
ありける有所の動のるきすりよ

秋春せて中小のこころすりとく
村ふ村よむのうまり盛り
暦新年も小寺む　玉垣

同楊園

玉道の両村て同と浙しめまいか待も
叫らよの村よ遊し本山寛の一宗す
其街よ我中の信かしにみすやたらく
の風情よ乃ふも市中いとめく宣しくれ
と亀隣の寺に浮よ中にく宿宝あてを然
以る都より為ゆやあらいの風色よくも
松い例よく古道の方成色の味い我以て
三代の名を我まてわらしてると新年

雲雀鳴横に山門の昼かな

降帰中もくみはらりや　丞佐

縄段の残りの風も止　萬紀

いけのうへけいもる茶の釜煮く　里介

今はしら秋嫁の出　也白

十六夜と月の下にて　了信

菊もともし水も手ぬく　笠雨

あとに宮おく紅葉の侘枝も　枝水

協行納の今年も寄りけん　李文

揉手らしかく新の光返し　素哲

不思議なる縁しお男の中

いもかみ株のさも暗くあら

門出の寺も嘆く呼すす

孫三のこのちと手すずし寛

同とも□くさ女房も

何とても吉うら鳥犬の降と喚き

打解しく　荷き貴畑

誰し行香に松原の利も来

気安へてぬくの末あんし

借かれ柳枝の仔自も日くお

隣からも立よる家の門の内の
升 其古も踊よの都哉
ちよほ山吹の実吟に
ん嘆しも霊の花の峯かな
定まりし雲のかすや に
淵をはなれて又のうや窓かけくて
兎にもかくにも是花の係のやうあかね
めでたさは一行にはじまりて
ふ稀に桂のしや 百日紅 鼎令
黒き漬き紙もちて山宿 万花

升 鶯撥ても行かも白毛まく 布
菜ふ七ッの行ち乞く 堆水
満汐より咲て月の荷雛も 了清
砧衣の秋成かよ係ら孫 京人
断上独棲ても早りつかれく 素信
影りしる門を立ち行く 正則
武神も極寒く捨よ二鐘昌 呈简
串て吹く家田楽の残 釣舟
寸の葉に列きて咲のなきに
水も白無て吹ぬ

昨もろき迄しての日数指くに
待ちぬるゝをふりて大切
請代にして中々に和尚の此よく
火燵の湯くゞ小湖の寄らぬ
[illegible]ちとりき竹雨さへ此月中
日おりの葉に借りき書門
中抑雨もいつしくふりて奇特
俳諧はしかし出来入ぬ
尚行の見え筆にも我へ中ず
内気てわき家の所代

健子まの跡をまた来ると
むきし合ふ者の我もうしとふ

五十韻　おく略

夏うれの竹に草舒の中つも除　可風
此心の夜に別しふふ薄　南
[illegible]脱きは[illegible]しらぬ可すあて　巴朗
先の花[illegible]庵しふ様よも湖　了佐
まへ人も音をならけりなを覚　京今
節まる師の気用ふ気用　支阿
里の秋子楼く月の新も添ひ　惟[illegible]

哉くゝ年の春ゝさゝく
川ゝむかしはきこゆれと停の月を吟さ
堪しつゝしも洞か川ゝきの
照ゝ清て飛入日のてら計と
多ら多ゝ沙りさばら仰がは
女身は蓋て何事よるれ
ら安さよこゝろ思つても
柏子木の響けり梢に秋の清も聞ゆ
皆りて博れ月ゝちらく
寝まゝすさ二百年日もわかゝ女に

三ご寃らおゝして角力修し
十寅に舞しさ備いふゝして中し
標ゝさるの頃哉あれしさ
そ川くふ川もけゝらるてひもこゝ留ゝ
思ゝ月ゝ京のまゝ帰る満
鼻よしむ島ゝ中よるゝうゝて
そ如きち情しれ秋ゝ山かと
常哉けふそふて氣いさゝ女ゝ
押しにきてゝまて雨の秋
禁制ききはゝさんゆふ道洞

ゆう久のかん母、春
ミけてうしく宮ん宮の内
ふいゆうさいやこえふ小仙
左うしのほし茶漬排やうふく
わ猪ゆ緑色の久ふいなれ迄
一東らんつしも出す子十月
江戸のお僧のこふ石門さ
待宵もさるせい枚の新もこ
弐代うとし紙引いし兎やふふ
耳いらん悟りの風ら身まさして

工会のうるん便らえと到
何とうくかけけしてもの者加状
本門みて嘉明過て
見てもふし大の全紙の路うと見
信ら為め新叙ふらさ星
覚えてが風しても地黄制
今うしもちいうおいけさの
かうえ悟のもうしの詩月叙
西紀のやうしふししさ
わふを堅望の営をせうし夜

めくるるの[illegible]

なるよ完りると[illegible]の日と[illegible]

ほよの旅も[illegible]

[illegible]

よる所ぬ月しも松の風涼

風涼しさ[illegible]せめくしの[illegible]

田糸もちよ[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神よかしぬ 搖り[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四角[illegible]天井の傘[illegible]

よの[illegible]も[illegible]

[illegible]も[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

かしましきのきつゝき後ふ也
嫁の縁のしめ蜘の作りし山寺
降借し中にの雲こそ[illegible]
浴田にも谷の月の旅中うき
すゝわまさかりてる御ら空ゆきと
出雨さうゝ月の秋の露さう
ふるさと於きの家も指揮も
あらし小小袖よ洲も荷らて
戸よ継ますゝるのかおる
まとちまほうでのおもかわし

神の道しのおしふくさ哉
東彦狩衲の田稲愚かさすれ
世をしたく侍れ我の行ち経
葛氣
き日のかしり何有の以師修当しり
下て誠のをもしふつ存きゝ又
かやかうき施しおからうかしかや
田舎よ語きの不井園与称吏の全
到信ぬ作しゝきの竹蔵特て
涼しゝむさも田山行し夜猿
桂雲
達しみ子およりいもしと宮色る
のおりけ字我ろに仏味の世
酒為くよりしまする特多しくる
わ川ゝゝ

枝ふかきとて 薄しもせわたり 今年の風　一[illegible]

去年の秋和歌の浦代に千々[illegible]廻り[illegible]
[illegible]ゆくへ[illegible]越路[illegible]の[illegible]
[illegible]しもれ[illegible]ふれ[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]其[illegible]申し[illegible]
[illegible]又[illegible]やゝ[illegible]の[illegible]
の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]西[illegible]の東[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]の
[illegible]

[illegible]の[illegible]雲の[illegible]　[illegible]

去年の中[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]のしも[illegible]りてその[illegible]

[illegible]の[illegible]の
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

枯く又咲今年菊の秋風も　仝

[illegible]の[illegible]

また[illegible]花の[illegible]風[illegible]　一[illegible]

よりし甲州も日まゐりこと
兄弟の祝言新宅もおもやしは
初の氷しも河崎町通り
出合も家持中して日の出
裕福儀のよう候て常
かくのみてかくくく外に候し
席は表しつるもかきとは
嫁入まするゝはしのぎまする
借あけられ給ゝ御座る
江戸の日かけても参らせし

叶留代

正月新しい神の姉ゝ
六徳守一郎

6231